

Title	李立三コース問題の一考察 (二・完)
Sub Title	On the Li Li-san line (2)
Author	石川, 忠雄(Ishikawa, Tadao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1953
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.26, No.9 (1953. 9) ,p.38- 52
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19530915-0038

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

李立三コース問題の一考察(二・完)

石川忠雄

三

革命工作の重點が都市と農村のいずれにおかるべきかという革命運動の基本的問題について、いわゆる李立三時代にどのような見解がとられていたかを明らかにするためには、一九二八年七月モスコに開かれた中共六全大會の諸決議を檢討することからはじめることが必要であろう。ただしこの大會は、一九二七年八月の八・七會議以後における瞿秋白の革命指導を批判し、向忠發・李立三のラインを正式に黨の指導勢力として承認したものであるからである。

周知のごとく、中共六全大會の中心的課題は、「第一は、一九二七年後半以來の革命の敗北及び鬭争の經驗に基づいて右翼的及び極左的偏向を克服すること、第二には革命の一時的退却の時期を正しく評價し新時期におけるレーニン主義の方針を確立すること、第三には、眞に革命的な農業綱領を確立すること」⁽¹⁾にあつたとされている。いかえればそれは、「當時革命の失敗によつて黨内にひき起されていた思想的混亂を克服」⁽²⁾し、ソヴェエト革命の基本方略を決定するものであつたのである。したがつて、大會のとりあげた問題が、極めて廣汎にわたるものであつたことはいうまでもない⁽³⁾。しかし、そのうちこ

ここでとくに注意しなければならないのは、この大會が、當時の革命情勢を二つの革命高潮の中間にあるものと規定し、その一般の方針を大衆獲得にもとめた事實であろう。政治決議は、これについて、いわゆる大革命時代の革命高潮は勞農階級の重大な敗北をもつてすでに過ぎ去つたこと、しかし反革命勢力は中國に内在する矛盾を解決することができず、しかも第三期に入つた世界資本主義の危機は中國革命の昂揚を促進するものであるから、將來における革命の昂揚は不可避であること、したがつて中國共產黨の一般の方針は來るべき革命高潮にそなえて大衆の獲得に努力することである旨を述べている。⁽⁴⁾ しかればこのような一般の方針との關連において、ソヴィエト革命における黨の任務はどのように定めらるべきであらうか。

この問題にかんする六全大會の決定で特徴的な點は、それが、ソヴィエト革命の主要な内容をなす土地革命の遂行に關連して、地主階級の土地の沒收及び分配ばかりでなく、農村ソヴィエトの建設・農民大衆組織の樹立・紅軍の建設及びパルチザン戦争の擴大など、從來に比して農村の革命工作に深い關心を拂つてゐることであるといつて差支えないであらう。このことは、毛澤東がエドガー・斯诺との對談において、「われわれの主な任務は、土地を分配することとソヴィエトを建設することの二つでした。われわれは、この過程を促進するために大衆を武装しようと考へました……しかし黨中央委員會はこの運動を認めていませんでした。それは、モスコイに開かれた共產黨六全大會の議事録が井崗山に到着した一九二八年の冬まで承認されませんでした⁽⁵⁾」と述べてゐることからも明らかである。⁽⁶⁾ それならば、このような農民運動の重視は、革命工作の重點が都市から農村にうつされたことを意味するのであらうか。いいかえれば、「武装した革命的農村をもつて都市を包圍する」という革命の基本方針が、この六全大會において明確に決定されたことを意味するのであらうか。そのようには思われない。このことは、農民運動と都市労働運動との關係にかんする六全大會の態度から容易にこれを窺うことができるであらう。

まず「農業問題決議」は、これについて、「農民中における労働階級の鞏固な指導は、農業革命の成功に對する不可缺の前提條件である」と述べている。このように、農業革命、ひいては農民運動に對するプロレタリアートの指導性を強調することは、中國におけるブルジョア民主主義革命がプロレタリアートのヘゲモニーのもとにおいてのみ可能であるとする中國共産黨の基本的立場からみて別段不思議はない。そこで問題は、大會が、當時の革命情勢のもとにおいて、農民運動に對するプロレタリアートの鞏固な指導を實現する方法をどこにもとめていたか、ということになる。政治決議は、「黨と労働階級の關係及び労働運動の問題」の項において、次のごとく述べている。「黨の主要な任務は、労働階級の大多數を獲得し、かれらに階級の先鋒隊である共産黨を積極的に支持させ、共産黨を信頼させ、且つ自覺的に黨の指導を受けさせることである。また労働運動とくに産業労働者に十分の注意が拂われなければならない。このようにしてはじめて労働階級の農民に對する指導を強化することができるのである」と。かくて、プロレタリアートの指導性の強化は、都市労働運動の發展にもとめられ、大會は、黨のプロレタリア的基礎の擴大を促進し、プロレタリアートと黨との關係に對する正確な觀念を普及し、強制及び命令主義を排し、革命的労働組合を復活し、國民黨に對する幻影をプロレタリアートから一掃し、日常經濟闘争を強化することを要求するに至つたのである。このことから知られるように、六全大會においては、都市労働運動は一つにはプロレタリアートの農民運動に對する指導性を保證するものとして考えられ、その發展のないところに農業革命の成功もありえないものとされている。労働運動に對する工作が「黨の主要任務」とされているのもここにその重要な原因があるわけである。したがつて、農民運動のもつ重要性が六全大會において強調されたことは事實であるにしても、このことから直ちに、農村工作に黨の活動の重點がうつされなければならぬとする結論はうまれてこないし、またそのようにならない明確な見解も六全大會の諸決定のうちにはこれを見出すことができないように思われる。その意味において、六全大會が、「黨の策略上必要な退却に對し、とくに黨の工作の重點を敵の力の比較的強い都市から敵の力の比較的弱い農村にうつさなければなら

ないというこの鍵になる問題に對して、必要な認識をもつていなかつた⁽¹⁰⁾とする胡喬木氏の見解は妥當であり、都市勞働運動に對する黨活動の必要は非常に高く評價されているわけである。

六全大會において示されたこのような都市工作觀は、李立三を中心とする黨幹部の指導のもとに、その後においても依然として繼續され發展せしめられている。この事實は、前記の六月十一日中央政治局決議に至る黨文書のうちに明白に示されている。よつてこれらのいくつかを擧げてその見解を明らかにすることにしよう。

まず、黨の機關誌である「布爾塞維克」第二十六期（一九二八年八月二十日）は、「八七會議と一年來の支那革命」と題する曹典氏の談話において、都市工作を輕視することの誤りを強調して次の如く述べている。すなわち、「農民運動の發展した區域、特に農民が鄉村に割據した地方では……或ひは勞働運動及び都市の一般鬭争を忽視し、或ひは鄉村の階級鬭争を指導することなく全都市に反對し、或ひは一隅の保守を主張して鬭争の範圍を擴大することを欲しなかつた。その結果は必然的に農村に都市の指導を得せしめず、農民はプロレタリアートの指導を受け得ざらしめ、そして土地革命を不成功ならしめた。共產黨は特にかゝる傾向の危機を防止し、且つ今後の勞農革命の趨勢は統治階級との都市××の鬭争であり、ただ都市勞働者及び貧農のみが廣汎に起つてかゝる鬭争の使命を負ひ得ると指令した⁽¹¹⁾」と。またこの年の十一月に發せられた黨中央通告は、『大衆中におけるわれわれの活動の主要な對象は、都市における廣汎な勞働大衆、とくに産業勞働者でなければならぬ。勞働者の指導なくして、農村における勝利の見込は殆んど存在しない。かくして、われわれの都市活動、とくに勞働運動内におけるその回復は、今や黨のもつとも緊急な任務となつてゐる。不幸にしてわれわれの勞働組合組織は最小限度にまで減ぜられ、都市における黨組織は粉碎され孤立せしめられている。われわれは、中國のいかなる場所においても、一つの鞏固な産業支部組織をすら見出すことはできない。……それ故に、中央委員會は、現在、上海・武漢・南京・天津・大連・ハルビンなどのような産業及び政治上の中心地にその主力を集中することを決定した。あらゆる地方において、われわれは

その主力を重要な政治的産業的中心地に集中しなければならない。……われわれは、極端に走つて、もつぱら都市における活動を行うために簡単に農村の活動を放棄してはならない。農村における活動は無視されてはならない。しかし比較して言えば、都市における活動がより以上に強調されなければならないのである」と述べ、黨活動の重點が都市工作にむけられなければならないことを主張している。

一九二九年六月から七月にかけて召集された二中全會は、「六全大會以後約一ヶ年間の情勢の推移を具さに検討し、將來の方針を指示した」重要な會議であるが、ここにおいても都市勞働運動に對する工作の重要性は依然として高く評價されている。⁽¹⁸⁾すなわちこの會議は、一方において、六全大會の指摘したごとく、第三期に入つた世界資本主義の危機を背景にして中國の政治的經濟的矛盾が激化していつた結果、「勞農大衆の鬭爭就大都市勞働者の鬭爭は昨年五月三日以來、確かに漸を逐うて復興の形勢となり」「革命新高潮の象徴は確かに認められる」に至つたことを指摘しながら、他方において、この革命情勢の昂揚はまだ不十分であり、「黨は更に強く大衆を獲得して以て全進路の執行を繼續すべきである」とし、ひきつづき大衆獲得を黨の基本的任務として提起している。かくて二中全會は、この基本的任務を實現する方途として、六全大會と同様に農村工作の重要性を強調し、「現在のかかる客觀的政治經濟條件下に於ける農民の土地革命の發展、同時に土地革命の過程に於ける赤軍建立こそ、×××××を推し進め、全國の勞農の最後の革命勝利を得る主要條件の一である。それ故黨は繼續して強く、農民大衆の土地革命鬭爭を發動させ、且つ指導すべきだ。ソヴェト區域に在つては、遊撃戰爭中に六全大會の土地政綱を實行することに努めねばならぬ」と述べている。しかし、「この一年來、客觀的に農民運動は依然として不斷に繼續發展してゐるが、しかし確かに黨の有力な指導及び計畫的運動を缺いてゐる。大部分の農民鬭爭は皆一種の自發的形勢にあり、故に大多數は皆偏僻な區域に於いて發展してゐて、重要産業區域及び中心城市の周圍に於ける農民運動の發展は極めて少い。……故に黨は今後特に農民に對する指導を強化し、更に計畫的に運動を進めねばならない」。しかれば、こ

のような農民に對する指導を含めて、黨の革命に對する鞏固な指導性はいかにして實現せられるか。二中全會は、やはりこれを黨のプロレタリア的基礎の擴大にもとめて次のごとく述べている。「若しも黨が労働者階級中に鞏固な基礎を有せず、各企業及び組合運動中に廣汎な労働者組織の基礎を有しないならば、黨は革命に際して指導的地位を握り得ないのである。故に組合運動特に鐵道海員礦山等の重要産業労働者中に於ける運動を強化することは、黨の當面最主要的任務である」と。かくて、労働運動に對する黨活動の一環として、「大衆の日常闘争の指導を強め」「大衆を日常の小闘争から大罷業にまで指導し、そして經濟的闘争から政治的闘争にまで發展させ、それに計畫的な準備を以て各種の大衆闘争を自由のための全闘争に合流せしむべき」ことを要求するに至つてゐるのである。

二中全會で示された都市工作の重要性は、李立三が一九三〇年三月二十九日の「紅旗」によせた論文——「準備建立革命政權與無産階級的領導」——において次のごとく表現されている。すなわち「全國的革命政權を樹立するために一省または數省を奪取することを、單に紅軍に依存することは、もつとも重大な誤りであろう。このような觀念は、本末を轉倒したものであるばかりでなく、われわれのもつとも重要な活動すなわち労働者の闘争の組織と武装労働者單位による政治ストライキの組織とをわれわれに無視させることにすらなるであらう。農村は支配階級の手足である。都市はかれらの脳髓と心臓である。もしわれわれが、かれらの脳髓と心臓とを切りとるならば、かれらは死を免れることはできない。しかし、われわれがかれらの附屬物を切りとるにすぎない場合には、それは必ずしもかれらを殺すとはかぎらないであらう」⁽¹⁴⁾と。

かくて、この年の五月五日上海郊外に召集された「中國ソヴェト區域代表大會」を経て六月十一日の中央政治局決議の採擇をみるに至るのであるが、以上の敘述から明らかなように、いわゆる李立三時代を通じて、農村工作がその重要性において都市工作と少くとも同等もしくはそれ以下に考へられていたことは否定しえないところである。もちろん、この時期に、農村におけるソヴェト及び紅軍の建設・パルチザン戦争の擴大・土地革命の遂行など、毛澤東を中心とする農民運動が顯

著な發展を遂げ、都市の勞働運動が豫期したほどの成果をあげえなかつたことは事實である。しかしこのことは、黨中央が農村工作に重點をおいていたことによるのではなく、かれらの期待は、一貫して都市勞働運動の發展と將來における都市の武装蜂起とにつながっていたのであり、六月十一日決議はこの立場をひきついだものにほかならないのである。かくて、この時代に、このような傾向に對して、コミンテルンがいかなる見解をとつていたかが次に明らかにされなければならない問題である。

- (1) プロレタリア科學研究所編「支那大革命」一五九—六〇頁。
- (2) 胡華「中國新民主主義革命史」(修訂本)一二七頁、邦譯前掲一二三—四頁。
- (3) 中西功氏は六全大會の重要問題を事項別に整理して次の如く述べている。1、中國革命の基本問題、この中で重大な事は(一)中國革命の性質(新民主主義)、(二)中國革命の動力(各階級の革命に對する基本的態度)、(三)中國革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーと革命の非資本主義的前途、このうち(三)が特別に重要であつたことは、陳獨秀等の日和見主義的誤謬がこれらを特別に歪曲してゐたからであり、中國革命の最も基本的問題だからである。2、中國革命のソヴェートの段階における革命戰略の基本問題、(一)當面のソヴェート革命の基本的テーゼ、(二)土地革命と農業綱領、(三)ソ区の建設と紅軍建設問題、3、現瞬間の革命情勢とそれに對處すべき黨の任務、(一)二つの波の中間に位する特殊な革命情勢、(二)黨の總戰術コース、(三)大衆獲得問題、4、二つの戰線の闘争、(一)右翼日和見主義に對して、(二)一揆主義に對して(中西功 前掲一七二—三頁)。また胡喬木氏は、六全大會の成果を要約して、「陳獨秀の投降主義を清算すると同時に左傾盲動主義の誤りを批判した。第六回大會は、中國革命の性質がなお民主主義革命であり、一般的任務は反帝反封建の勞農民主專政を樹立することである旨を確定するとともに勞農民主專政の各項の綱領を規定した。大會は紅軍を建設し、農村革命根據地を建設し、土地分配を實行する任務を提起した。大會は、革命の高潮が不可避であることを指摘したが、また當時の政治情勢は二つの革命高潮の間にあることを指摘し、革命發展の不均衡を指摘し、黨の當時の一般的任務は進撃でも蜂起を組織することでもなく、大衆を獲得することであることを指摘した。これらはすべて第六回大會の功績である」としている(胡喬木 前掲二二頁、邦譯二六一頁)。
- (4) 中國共產黨第六次全国代表大會議決案七頁以下。なおここでは、大衆獲得という一般の方針が武装闘争方式と對立するものとして考へられていないということに注意しなければならぬ。
- (5) Edgar Snow, *op. cit.*, pp. 152-3.
- (6) 従來農民運動が輕視されてゐたことについて、中西功氏は次の如く述べている。「八・七會議は土地革命を當面の中共の總スローガン

としたのである。而もこれは勞農紅軍の建設、革命根據地とソヴェートの樹立並びにこの根據地における地道な經濟建設の遂行と言う點まで具體化されねばならなかつた。然るに全體として當時の黨中央では、國民黨左派に對して大きな幻想を持ち乍らも盲動主義の傾向が強かつた。その根源は大革命時代の都市鬪争の華やかさに幻惑され中國革命が長期の慘苦な鬪争を必要とすること、而もこれが長期なのは都市が眞黒な反動の根據地となり、革命は多くの場合農村を根據地とせざるを得ず、中國革命はこれを根據地として一步一步地道に進むのがむしろ中國革命としては常道なのだと言ふことがどうしても理解され得なかつたからである。その反面には中國農村革命の力の過少評價があつた」と(中西功「武漢に於ける革命と反革命」一五二—三五頁)。

(7) Brandt, Schwartz and Fairbank, op. cit., p. 164.

(8) 中國共產黨第六次全國代表大會議決案一四頁。

(9) 中國共產黨第六次全國代表大會議決案一三頁以下。

(10) 胡喬木 前掲二二頁、邦譯二六二頁。

(11) 山口慎一譯編「支那問題研究資料」第二輯七五頁。

(12) Schwartz, op. cit., pp. 128—9.

(13) 二中全會決議の引用は、すべて波多野「支那共產黨史」三〇七頁以下の決議全文によつた。決議にあるフセ字は、筆者の判斷により適當と考えられる字句を挿入したが、明確な判斷を下しえないものについてはフセ字のまま引用することとした。

(14) Schwartz, op. cit., p. 138.

四

李立三時代におけるコミンテルンの見解は、中國共產黨の場合と同様に、中共六全大會とほぼ時を同じくして行われたコミンテルン第六回大會の決議からこれを検討するのが順序であるが、そのまゝに、一九二八年二月のコミンテルン執行委員會第九回プレナムで採擇された「支那問題に關する決議」にふれておくことが必要であろう。この決議は、スターリン・ブハリン・向忠發・李立三をその原案提出者とし、廣東コミニューンを轉機として新しい段階に入つたソヴェート革命の在り方について、コミンテルン及び中共の共同の意思を示したものにほかならないからである。

決議は⁽¹⁾まず、中國革命の現在の段階は依然としてブルジョア民主主義革命であること、しかし「共產黨のソロオガンの下に……立てる労働者と農民との廣汎なる革命的運動の第一波は過ぎ去り、現在では「革命的大衆運動の新たな、有力な發展を問題にし得ない」にしても、「多く徴候が、労働者及び農民革命が正にさうした新たな發展に向つてゐることを示してゐる」こと、中國に於ける革命の發展は不均等に行われ、現在では「農民運動が多く省に於いてなほ發展してゐるときに、致命傷を與へられそして未聞の白色テロの鐵鎖に縛られた労働者運動が多く工業中心地に於て或る程度の鎮靜の段階を経過」していること、等を指摘し、このような情勢のもとにとらるべき黨の根本的な戰術方針は、「新たな革命の波の著しき發展のために準備」することではなければならない、となしている。しかるに革命の新たな發展は、「黨に向つて、無條件に直接的戰術的任務として大衆的武装暴動の組織と遂行とを課する」ものであるから、現在の「黨の全活動の重點は、労働者と農民との幾百萬大衆の獲得に、彼等の政治的啓蒙に、彼等を黨と黨のソロオガン（地主の土地の沒收、八時間労働制、支那の全國的統一、及び帝國主義の束縛からの解放、現存政權の顛覆、労働者と農民との獨裁、ソヴェエトの組織）との周りに組織すること」、いかえれば「労働者と農民との間に於ける黨の大衆的活動を強化する」ことになければならない。

かくて、以上の敘述から、「支那問題に關する決議」が都市労働運動に比して農村工作に優越的地位を與えているといふいかなる根據をも見出すことは不可能である。このことは、同決議がさらに「個個の省に於ける農民の自然發生的なパルチザン行動を指導するに當つては、黨は、この行動が、プロレタリア的中心地に於ける革命の波の新たな擡頭とともに進むといふ條件の下に於いてのみ全民衆の勝利ある革命の出發點に變り得るといふことを考慮せねばならぬ」と述べ、革命における都市工作の重要性を強調しているところからもこれを明確に認識することができるであらう。

「支那問題に關する決議」に示されたこの見解は、そのままコミンテルン第六回大會にひきつがれている。すなわち、大會は、第三期に突入した世界資本主義の危機を基盤とする中國の革命情勢について、「國際情勢とコミンテルンの任務」と題

する決議のなかで、「大體に於いて現在の情勢は支那の廣漠たる領土の種々な部分に於ける發展の全不均衡を顧慮に入れて、革命の飛躍に對する大衆の準備期として特徴づけられうる」と規定し、「革命的昂揚の二つの波の中間期たる今日に於ける黨の重要な任務は、大衆獲得の鬭争、即ち勞働者農民間での大衆的活動、其の組織の再建、革命鬭争を發展させる目的を以て、地主、ブルジョア、將軍、外國帝國主義者に對するあらゆる不平不滿を利用する」こと⁽³⁾でなければならぬ、としているのである。このような黨の主要任務については、同じくコミンテルン第六回大會で採擇されたいま一つの決議、「植民地及び半植民地諸國における革命運動」にさらに詳細に述べられているが、ここにおいても勞働運動及び農民運動に對する黨工作の重要性は同一の比重において論じられ、後者に對する工作がとくに強調されているという事實は全く存在しない。⁽⁴⁾むしろわれが注目しなければならないのは、上述の黨の主要任務を遂行するために、「黨自體を、萬策を講じて強化する必要がある」旨を主張していることである。黨の強化は、いうまでもなく、第六回大會で強調されている革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーを強化するもつとも重要な手段であり、それは主として共產黨が「その社會的構成に於て眞にプロレタリア的なる」こと⁽⁵⁾によつてなしとげられる。かくて、ここにも、この大會が「勞働組合活動」を「植民地及び半植民地に於ける共產主義者の當面の一般的課題の内、最も重要なものと認め」⁽⁷⁾ている根據があるように思われる。

つぎに、この問題を、一九二九年二月、「中國共產黨中央委員會に寄するコミンテルン執行委員會の書翰」⁽⁶⁾についてみてみよう。書翰はいう。「コミンテルン第六回大會は、支那に於ける現在の時期を『革命の新しい昂揚に向つて大衆を準備させる』時期と特徴づけてゐる。是は最も重要な事柄であり、今日中國共產黨は是を肝に銘じてゐなければならぬ。封建分子とブルジョアジーとのブロック打倒の爲の、プロレタリアートと農民の革命的、民主主義的獨裁の樹立の爲の差迫つた鬭争に、黨自身も準備をし、廣汎な大衆、殊にプロレタリア大衆を準備させなければならぬ。若しも共產黨が時を逸せずして自己の陣列を強化し、産業プロレタリアートの陣營に於ける自己の勢力を強化し、組織されたプロレタリアート側からの鬭争を通じて、

行ふ農民の指導を強化し得なかつたならば、國內に革命的危機が襲來した時、黨は客觀的に革命的な情勢を充分に利用することも、革命の勝利を確保することも出來ないであらう」と。かくて同書翰は、黨の根本的任務を、(一)非合法的共產黨の強化、その組織權威及び指導的勢力の強化、(二)國民黨の政策に對する幻想の粉碎・國民黨の政策の暴露・國民黨支配の顛覆に備えて大衆を準備すること、(三)廣汎な勤勞者層からの黨の遊離の清算・大衆とくに勞働者大衆の革命化と獲得、の三項目に要約しつつ、プロレタリアートのヘゲモニーの問題と關連して次の如く述べている。すなわち、「あらゆる大衆的進出に際し、又ストライキ、農民の蜂起、反帝國主義的大衆運動に際して、共產主義者が精力的に是に参加するに當つては、勞働者階級の革命的創意を發揮し、勞働者階級の周圍に都市農村の何百萬人といふ勤勞者大衆を動員し、斯くて解放運動に於ける指導的役割(ヘゲモニー)をプロレタリアートに確保するといふ、戰術的目的の實現を期しなければならぬ……全黨員は、勞働者階級の大衆中に下した堅固な深い根が無くては、企業や勞働組合運動中に廣汎な組織的基礎を有せずしては、黨が支那革命に於て指導的役割を演じ得ないことを意識しなければならぬ。黨が現在、企業や勞働組合運動やストライキ運動で、愈々益々鞏固な地位を獲得すればする程、切迫した階級闘争の時に愈々強い力を發揮し得るものであることを、黨員は意識してゐなければならぬ」と。プロレタリアートのヘゲモニーの點からも、また革命における黨の指導的役割のために、依然として都市勞働運動に對する工作の必要が革命的な基本的要求として強調されていることは明らかである。ところでこの書翰では、農民問題については全くふれられていない。これは、農民問題の重要性が閑却されたことによるのではなく、それが高く評價されているために、別個の書翰によつて取扱うというたてまえをとつたからにほかならない。一九二六年六月の「農民問題に關し中國共產黨中央委員會に寄するコミンテルン執行委員會の書翰」がそれであるが、ここにおいても黨活動の重點を農村工作に移さなければならぬとする明確な指示を見出すことはできないように思われる。⁽⁹⁾

また一九二九年十二月の「中國共產黨中央委員會に寄するコミンテルン執行委員會の書翰」⁽¹⁰⁾は、これまでの決議及び書翰

とは異り、中國が「深刻なる全國民的危機の段階に入つた」ことを認め、このような全國民的危機がどのような速度をもつて直接的革命情勢へ移行するかは豫言できないにしても、「今や既にブルジョア地主ブルックの權力の革命的な顛覆に大衆を準備し、階級闘争の革命的形態（大衆的政治罷業、革命的デモンストレーション、パルチザンの進撃等々）を益々積極的に展開し擴大しつゝ、ソヴェートの形式で労働階級及び農民の獨裁制の樹立を準備することは可能であるし、且必要である」段階に入つたとの見解を明らかにしている。そして、この新たな革命情勢の昂揚に對して、上記の課題を遂行するため、黨の緊急の任務として (一)革命的獨立の大衆運動を一層展開させるためにあらゆる手段を盡して軍閥戦争を利用すること (二)大衆に對する影響力を獲得し、プロレタリアートのヘゲモニーを獲得するために國民黨「改組派」に對する闘争を行い、その影響を粉碎すること (三)労働者のストライキ闘争に特別の注意を拂ひ、政治的ストライキの發展に全力を注ぐこと (四)すべての帝國主義諸國、とくにアメリカ帝國主義に對する反帝國主義運動の發展とその指導權獲得のための闘争に注意すること (五)とくに滿洲各地及び毛澤東、賀龍の活動地方においてパルチザン戦争を強化擴大しソヴェート根據地の創建に努力すること、ただし「農民運動に於けるプロレタリアートの指導を極力強化しつゝ、労働者大衆の間に農民闘争の任務を説明することに努力」すること (六)これらの任務を成功せしめるためプロレタリアートの前衛たる黨の闘争能力の強化と積極化を圖ること——を主張している。ここにみられる都市労働運動工作の重要性は、一九三〇年二月の「コミンテルン執行委員會擴大幹部會の決議」においても次の如く言及されている。「植民地及び隸屬國に於ける共產黨の活動の中心には、都市及び農村の労働者大衆の、成熟しつゝある民族革命運動に於て、プロレタリアートが指導的役割を獲得する根本條件として、大衆的プロレタリア組織の設立と強化及び其の階級的獨立性の確保が存在しなければならぬ。支那に於ては、共產黨と赤色労働組合との強化、而して又國民黨系の労働組合に於ける大衆の獲得と、革命的農民大衆に對する労働者階級の指導の確保の任務に我々は當面してゐる」⁽¹²⁾と。

中國共產黨が六月十一日決議を採擇するまでの期間において、黨の革命工作の問題について、コミンテルンが行つた指導の概要は以上のごとくであるが、これを通觀して明らかなように、コミンテルンが黨活動の重點を農村工作にうつすことを、いいかえれば「武装した革命的農村をもつて都市を包圍する」という革命の基本方針を中國共產黨に對して明確に指示したという事實は見當らない。⁽¹³⁾むしろ、場合によつては、プロレタリアートのヘゲモニーとの關連において、勞働運動に對する工作の必要がより以上に強調されているかのごとき感じをすらいだかされるのである。とくに、中國共產黨の革命活動が、李立三の指導のもとに、勞働運動を重視することから次第に都市における武装蜂起への途を歩んでいる過程において、コミンテルンがこの問題について明確な指導を行わなかつたということは、以上の事實を端的に示したものといえるのではなからうか。

前述したように、一九二五—二七年の大革命敗退後の中國において、革命發展の不均等性に對する正確な認識の存在するかぎり、その當然の歸結として、都市工作と農村工作とを同列視することも、また前者に革命工作の重點をおくこともありえないとすれば、この時代にしめされたコミンテルンの態度は、やはり革命發展の不均等性に對する正確な且つ徹底した認識を缺いたものといわざるをえないであろう。コミンテルンが、中國革命の特質として革命の不均等的發展を認めながら、これを革命運動の在り方について「武装した革命的農村をもつて都市を包圍する」というところまで具體化しえなかつたのは、明らかにここにその重大な原因があるといわざるをえないのである。

コミンテルンが、中國共產黨に對して、しばしば一揆主義の危險を指摘し、中國の革命情勢が昂揚への途をたどりながら未だ十分に成熟していないことを警告していたことは事實である。しかし、それと同時に、コミンテルンが、既述のごとく六月十一日決議の誤謬の基礎をなすものとして指摘した革命發展の不均等性に對してみずから徹底した理解をもつていなかったことも、またそのような不均等性の認識に立脚した十分な革命指導を行つていなかったことも否定しえないところで

ある。したがつて、六月十一日決議に對するコミンテルンの批判が、マルクス・レーニン主義の立場からなされた批判として妥當なものであるにしても、このことは、六月十一日決議以前におけるコミンテルンの見解が李立三のそれと革命の基本問題について大きく對立していたということを意味するものではないのである。むしろわれわれは、兩者の間に、中國革命發展の特殊性及びそれから導き出される革命運動の在り方について、相通ずる見解が存在していたと考えるべきであらう。この意味において、六月十一日決議の誤謬には、それまで中國共產黨に對して詳細な指導をあたえてきたコミンテルンもまた無關係ではありえないといふるのではなからうか。そして、革命に對するこのような立場は、農村をまず武装強化してその後都市の占領にすすもうとする所謂毛澤東コースが、中國共產黨の革命運動の主流としての地位を次第に獲得していく過程におけるコミンテルン及び中國共產黨の革命認識の一般的傾向を代表するものであつたといふるのではなからうか。

- (1) 本決議については波多野「支那共產黨史」二二八頁以下及び外務省調査部 前掲二二七頁以下参照。
- (2) コミンテルン編「戰略戰術決議錄」二四六頁。
- (3) 外務省調査部 前掲二三四頁。ここに引用した部分は「戰略戰術決議錄」二六二頁にも收められているが、脱字があり引用文を含む文章全體の意味が不明のため、決議の一部分を抜萃収録している本書に據つた。
- (4) 外務省調査部 前掲五七頁以下参照。
- (5) 外務省調査部 前掲二三四頁。
- (6) 外務省調査部 前掲八九頁。
- (7) 外務省調査部 前掲九〇頁。
- (8) この書翰については、外務省調査部 前掲二四三頁以下参照。
- (9) この書翰については、外務省調査部 前掲二六一頁以下参照。
- (10) この書翰については、外務省調査部 前掲二八〇頁以下参照。
- (11) この問題については、當時のソヴェート連邦の有力な中國専門家であるミフは、「支那労働階級の今日の闘争は、苦しい困難な條件の下

に推移してゐるが、だが一月一月と、愈々新しき労働階級の部隊は沈滞の状態を征服する。そして、支那プロレタリアートの經濟闘争が非常に速に政治闘争に轉化すると言ふ此の事實は、共產黨による總罷業の準備の現實性を物語る。此の闘争課題は第十回總會が總ての支部に課した所であり……」と述べ、總罷業が現實の課題となつてきたこと、及び黨として總罷業を行うべき任務を有することを明らかにしてゐる(滿鐵支那月誌第七年第一號、ミノ「現代支那の經濟狀態」七九頁。因にこの論文は、Die Kommunistische Internationale 1929. Heft. 37. Berlin Den 18. September に掲載された Mitf. Der wachsende revolutionäre Aufschwung in China を翻譯したものである)。

(12) 外務省調査部 前掲三〇三頁。

(13) しかし、六月十一日決議の後に、すなわち一九三〇年七月二十二日に行われたコミンテルン執行委員會の「支那問題に關する決議」は、これまでの決議及び書翰とは異り、農村ソヴェト及び紅軍の建設・土地革命の斷行・パルチザン戦争の擴大など、農村工作を緊急の任務として強調し、農村ソヴェト運動の著るしい發展に注目して農村工作を重視する傾向が次第に強く現れてゐる。しかし同時に、プロレタリアートのヘゲモニーの必要も強調され、それと關連して都市労働運動の重要性も忘れられてはいない。それにしてもこの決議で對農村工作にコミンテルンの意思が次第に強く動きはじめてゐることは否定できないように思われる。なお本決議については、波多野「支那共產黨史」五六四頁以下及び外務省調査部前掲三〇四頁以下を参照されたい。

後記 本稿の執筆に當つては、國會圖書館中國資料研究室平和彦氏に、資料の閲覽について種々御配慮をいただいた。深くその御厚意を感謝する。